## ≪発掘調査の概要≫
## 纒向遺跡の居館域を求めて・・・(纒向遺跡 162 次調査)

### 1．はじめに

この度、桜井市教育委員会では桜井市大字辻 64-1 番地において纒向遺跡の範囲確認調査を実施しました。この調査は平成 17 年度から継続的に実施してきました纒向遺跡及び纒向古墳群の史跡指定を目指した範囲確認調査の一つであり、纒向古墳群の範囲確認調査の目途がついたことを受けて集落部分の調査に着手したものです。

今回の調査地は昭和 53 年度に県立橿原考古学研究所が発掘調査を実施し、一辺約 4.8 m×5.4 m の建物（SB-101）や柵列（SA-101）の一部が検出された纒向遺跡第 20 次調査地（辻 64-1 番地）と同一地点であり、今回は第 20 次調査で検出された遺構群の全体像を解明するために前回の調査トレンチをも含めて再度の調査を実施したものです。

なお、調査は平成 21 年 2 月 3 日から平成 21 年 3 月 31 日の間に行われており、調査面積は 384.5 ㎡となります。

### 2．調査地の位置と環境

調査地は標高 75 m前後の東側から派生する扇状地上の微高地にあたります（図 1）。この微高地は太田北微高地と呼ばれているもので、微高地の南北には旧河道が流れていた事が判明してお

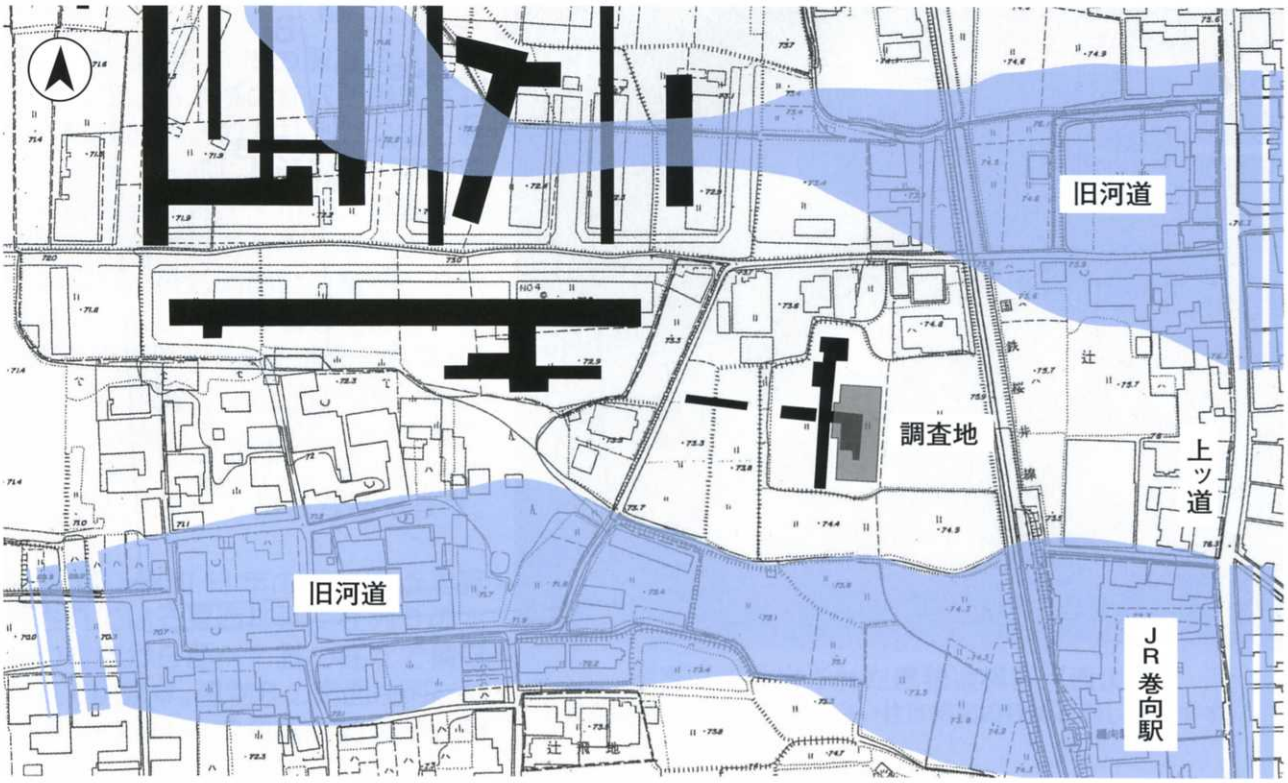


図 1　調査地位置図

り東西に長く南と北に存在する谷部分より約２ｍ高い地形を形成しています。周辺は纒向遺跡内でも比較的古い段階（３世紀前半・庄内式期）の遺構が密集して分布する地域であり、先述した第 20 次調査においても庄内式期を中心とした多くの遺構が確認されています。

## ３．検出された遺構

今回の調査では第 20 次調査の成果を受けて上層では３世紀後半の遺構面となる包含層Ⅲ上面を、下層では包含層Ⅲの下部において確認された３世紀前半の遺構面となる地山及び整地層上面の２面において調査を行っていますが、ここでは多くの柱列や建物群が確認された下層検出の遺構群について見てゆくこととします（図２）。

**遺構面の状況**　３世紀前半段階の遺構が存在する下層の遺構面は大きく分けて黄褐色粘質土（地山）・灰褐色砂礫（縄文時代後・晩期以前に形成されたとみられる堆積層）・黄褐色粘質土ブロックを多く含んだ灰褐色土（整地土）の３つの土壌から構成されています。調査区の中央部、建物

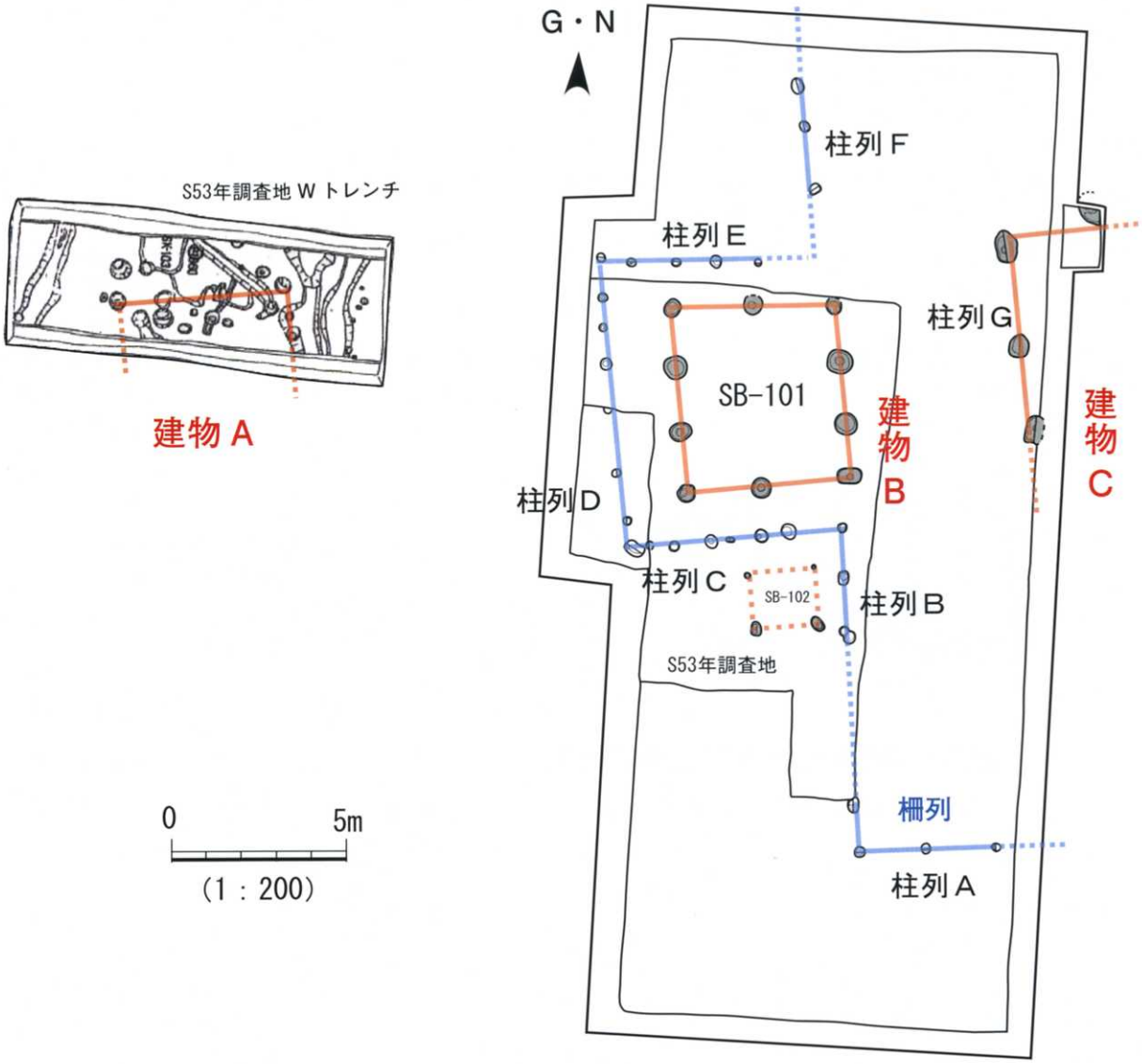


図２　遺構配置図

Ｃの柱列Ｇ南端に位置する柱穴より南にかけては調査区内では微高地内でも最も高い地点に位置するものとみられ、遺構面には黄褐色粘質土の地山が一部露呈しています。

さて、調査区の南半は南側に位置する谷部へと向かって地山が徐々に落ち込んでいく状況にありましたがこの上には縄文時代以前の堆積土とみられる灰褐色砂礫層が厚く被っており、下層遺構はこの灰褐色砂礫層上面において検出されています。

また、調査区の北半もやはり北側の谷部へと地山が徐々に落ち込んでいますが、この部分は整地土によって平坦面が造成されており、下層遺構はこの整地土の上面において検出されています。

写真１　調査風景（北より）

**柱列Ａ**　調査区南半部において検出された東西方向に並ぶ３基の柱穴で構成される長さ４ｍ以上の柱列です。柱列の延長線上の西側からは柱穴が検出されていない事から西端は確認されていますが東側は更に調査区外へと延びる可能性が高いと考えています。

なお、最も西に位置する柱穴は柱列Ｂの延長上に位置しており、柱列Ｂと接続する可能性が考えられます。

**柱列Ｂ**　昭和53年の調査時点で確認されている３基の柱穴で構成されSA-101と呼称された柱列がこれに相当します。先述した建物Ｂの南面柱列との間隔は約1.4ｍで、建物Ｂと同時期に築かれたものと考えられているほか、最も北側に位置する柱穴は柱列Ｃの延長に位置しており、柱列Ｃに接続するものと考えられます。

今回の調査では柱列Ｂの延長上、柱列Ａ西端柱穴の北側において柱穴を１基検出しており、一連のものと考えると9.2ｍの長さがあります。

**柱列Ｃ**　昭和53年の調査時点で確認されている東西柱列で柱列Ｂの北端の柱穴から西へ７基の柱穴で構成されています。建物Ｂの南面柱列との間隔は約1.4ｍで今回の調査では西

写真２　検出された建物遺構群（西より）
黄色い柱は建物の柱跡で白い柱は柵列の柱跡を示しています。

写真３　建物Ｂと柵列の様子（東より）
黄色い柱は建物の柱で白い柱は柵列の柱跡を示しています。

端から２基の柱穴が新たに確認され、東西６ｍの長さがあることが判明しているほか、最も西側に位置する柱穴は柱穴列Ｄの延長上に位置し、柱列Ｄに接続する可能性が考えられます。

**柱列Ｄ**　建物Ｂの西面柱列の約 1.8 ｍ西側で検出された柱列で、昭和 53 年の調査地内に存在する柱穴３基を含んで８基の柱穴で構成されており、柱列の長さは 8.2 ｍあることが判明しています。
　なお、最も北側に位置する柱穴は柱列Ｅの延長上に位置するもので、柱列Ｅに接続する可能性が考えられます。

**柱列Ｅ**　建物Ｂの北面柱列との間隔約 1.4 ｍのところで検出された延長距離 4.6 ｍ以上の５基の柱穴からなる柱列です。この柱列は東に向うに従ってやや南方向に振れる傾向が認められますが、これは柱列を構築する際にやや南へと振れを持つ建物Ｂの北面柱列に沿わせて柱列Ｅを構築したためだと考えられます。
　本来は東側に更に１基の柱穴が存在した可能性が考えられますが、柱列Ｅの延長上には後の遺構である庄内３式期の溝 SD-2001 があり、これによって削平されてしまったものと考えています。

**柱列Ｆ**　調査区の北部において検出した南北柱列で、３基の柱穴から構成されています。柱列Ｆは南北方向に 3.2 ｍ分が検出されており、本来は更に長く続くものと思われますが、北側は調査区外へと延びており、全長は不明です。
　また、柱列の南端で検出された柱穴は先述した溝 SD-2001 によって西半が大きく削平を受けていましたが、本来はさらに南側に存在したと考えられる柱列Ｅ東端の柱穴と接続するものと考えられます。
　なお、この柱列Ｆは建物Ｂの南側で検出されている柱列Ｂの延長線上に正しく位置するもので、これら一連の柱列は建物Ａ・Ｂ・Ｃなどの他の建物遺構とともに厳密な設計のもとに計画的に構築されたものと考えています。

**建物C**　調査区中央東側で検出された南北２間以上、東西１間以上の建物跡です。先に見てきた柱列とは異なり、やや大きめの柱穴の中に柱の痕跡を残すもので、建物Ｂの東側に展開する建物跡と考えています（写真４）。

建物Ｂとは方位を揃えて構築されたもので、建物Ｂとの距離は約5.2ｍ、南北に６ｍ以上、東西に2.8ｍ以上の規模を持つものであることが判明しており、建物Ｂよりも大きな建物になる可能性があると考えていますが、遺構の大半は東側の調査区外へと展開しており詳細な規模や構造は不明と言わざるを得ません。今後の調査が期待されます。

## ４．遺構の時期

各遺構の所属時期については遺構出土の遺物の分析や土層の層位的検討を行い慎重に吟味して決定しなければなりませんが、今回の調査にかかる出土土器は多量であり、現時点ではすべての土器資料の整理が終了していないため厳密な時期を導き出すのは困難な状況にあります。

しかしながら、これまでに得られた知見では整地土の造成及び柱列・建物群の構築時期は３世紀前半の庄内式期古相段階のものと考えられる一方、その廃絶は柱列の一部を切って掘削された溝SD-2001（写真５）の時期や柱列Ｆ北端柱穴の柱材の抜き取り穴に納められた土器（写真６）の年代などから３世紀中頃の庄内３式期とするのが妥当と考えています。

この事は、下層遺構面を覆う包含層Ⅲ上面、上層遺構の調査においては３世紀後半のものとみられる布留０式期の土坑などが複数確認されていることからもうかがえるものです。

写真４　建物Ｂ・Ｃ全景（西より）

写真５　調査区全景（北より）

写真６　柱材抜き取り穴内の遺物出土状況（東より）
脚台付きの丸底鉢と土製支脚が納められていました。

## 5．まとめ

今回の調査では第20次調査で確認されていた建物Ｂとその周辺に展開する遺構の状況について様々な新しい知見を得ることができました。これらの知見を順に挙げてみると、

① 第20次調査では建物Ｂの周囲には柵列の存在が想定されていましたがその具体的な様相はよく解っていませんでした。今回の調査では柱列Ｂ－Ｆを結ぶ南北ラインよりもSB-101及び柱列Ｃ～Ｅが西へと張り出し、建物Ｂの周囲を取り巻く状況が確認されるとともに、柱列Ａの存在により更に東側へと柱列が伸びていくという複雑な構造が確認されました。建物Ｂが南北軸の中心と仮定して柱列の展開を想定すると柱列で囲まれる範囲の南北長は約26ｍとなります。
② 建物Ｂの東側で検出された建物Ｃの存在からは柱列Ａ～Ｆで囲まれた内部に複数の建物が建てられていたことが確認されました。また、建物Ｃは柱列Ａ～Ｆ・建物Ｂなどと軸線を揃えて構築されている事から一連の遺構群が強い規格性を持って構築されたと考えられます。
③ 第162次調査と第20次調査の遺構平面図を合成して検討を行った結果（図２）、第20次調査のＷトレンチ部分において柱列Ｅや建物Ｃの北端柱穴と東西方向に軸線を揃えた柱列が確認され、建物Ｂの西側にも建物Ａが存在する可能性が考えられることとなりました。この柱列は東西３間（約５ｍ）×南北１間（約1.3ｍ）分以上が確認できるもので、建物Ｂからは約10.5ｍ、柱列Ｄからは約９ｍ西に位置するものです。

以上、これらの事柄を総合すると今回新たに検出、或いは確認された柱列の存在からは軸線を揃えた建物が東西に３棟連続して構築されていることが確認されました。

また、建物Ｂの周囲を取り巻く柱列Ａ～Ｆの存在は柵列になるものと考えており、今回調査の対象となった微高地上が区画を分けながら計画的に利用されていた事がうかがえます。

古墳時代前期初頭においてはこのように複雑かつ整然とした規格に基づいて構築された建物群の存在は全国的にも珍しいもので、これらの遺構群が纒向遺跡の中でも何らかの特別な施設の一部となる可能性がでてきたことは特筆すべきことと言えるでしょう。今後は更に周辺地区の調査を推進し、その構造や性格を明らかにしていきたいと考えています。（橋本輝彦）

### ● 纒向遺跡 162次調査の現地説明会 ●

纒向遺跡第162次調査では３月22日に一般の方々を対象に現地説明会を開催しました。当日の天気予報は雨、降水確率は90％と絶望的な状況で説明会が始まる頃には今にも雨が降り出しそうな曇天でしたが、お昼が近づくにつれ徐々に天候が回復し、何とか終了予定の午後３時まで説明会を続けることができました。今回の調査には纒向遺跡をこよなく愛する俳優の苅谷俊介さんが助っ人として参加しておられましたが苅谷さんは自称「晴れ男」とのことで、天気がもったのは三輪山の神様と自分のお陰と仰っていましたが果たして・・・。

とにもかくにも約2,500人と多くの皆さんの参加を頂くことができました。この調査では調査期間中も連日多くの見学者で賑わい、延べ3,500人を超える方々が来跡されています。

説明会当日の様子

見学者に説明中の苅谷さん

## 箸墓古墳周濠の調査（纒向遺跡第 163 次調査）

4 月 8 日から 5 月 30 日にかけて箸墓古墳の前方部南側において古墳の範囲確認調査を実施しました。この調査は古墳周辺に埋没している周濠の形状を確認することを目的としたもので、古墳の南に隣接する道路際から南側へむけて幅 3.5 m、長さ 82 mの細長いトレンチを設定しています。

箸墓古墳の周濠についてはこれまでの調査結果から内・外の二重の濠が存在する可能性が指摘されていましたので今回の調査ではこの二つの濠を平面的に検出すべく内・外濠を横断する形で上記のような細長いトレンチを設定したものです。この調査成果については現在整理作業中ですが、周濠の構造に関する様々な知見が得られています。

箸墓古墳と調査区の様子（南より）

作業風景（北東より）

## 遺物整理作業と報告書の作成業務

現地調査が終了した後、出土した土器や木製品などの遺物は埋蔵文化財センターにおいて整理が行われ、調査の内容についての詳細な記録を記載した調査報告書が刊行されます。調査報告書はこれが刊行されないと発掘調査は終了したとは言えないとされるほど重要なものですが、刊行に向けての遺物の整理や原稿の執筆は現地調査の何倍、時には何十倍もの時間がかかる大変な作業です。

現在、埋蔵文化財センターでは市内各地で行った調査出土の遺物整理や報告書の作成を行っていますが、纒向遺跡関連では纒向石塚古墳、纒向遺跡第 162 次調査の報告書の刊行を目指して整理作業を行っています。

纒向石塚古墳は 3 世紀代に築造された国内最古の前方後円墳として、纒向遺跡第 162 次調査の建物遺構群は倭国王・卑弥呼の宮殿跡か？とも目されているもので、いずれもが邪馬台国時代の重要な遺跡として全国的に注目されています。

纒向遺跡第 162 次調査
出土土器の復元作業の様子

纒向石塚古墳出土土器の
実測作業の様子

## 堂ノ後古墳の調査はじまる （纒向遺跡第 164 次調査）

堂ノ後古墳の調査風景（西より）

大字箸中で堂ノ後（どうのうしろ）古墳の範囲確認調査が 6 月 25 日から始まりました。この古墳は最古級の前方後円墳の一つ、３世紀中頃の古墳として有名なホケノ山古墳の西に隣接する古墳で、発掘調査が行われたことはありませんが、一部の研究者の間では古墳出現期の前方後円墳になるのではないかと考えられています。

今回の調査は小規模なものですが、古墳西側の周濠から前方部推定部分にトレンチを設定し、築造時期と墳形の確認を目的に行われています。調査担当は今春から桜井市にやって来た城郭大好きの新人、金松誠君です。纒向遺跡内で新たな最古級の前方後円墳の確認となれば大発見!! 果たして彼に幸運の女神は微笑むのか？ 乞うご期待。

## 埋蔵文化財センター展示室からのお知らせ

埋蔵文化財センター展示収蔵室では 10 月 4 日までの会期で平成 20 年度調査速報展『50 cm下の桜井』を開催しています。昨年度に調査を行った箸墓古墳や矢塚古墳・東田大塚古墳などの範囲確認調査の成果や今回概要を報告しました纒向遺跡辻地区の建物群、渡来系の人々の墓と考えられている風呂坊古墳群、弥生時代の木製甲や銅鐸片が出土した大福遺跡などの出土遺物を展示しています。是非、御来館下さい。

開館時間 9:00 ～ 4:30　休館日 毎週月・火曜日及び祝日の翌日・7 月 22 日・9 月 25 日
入館料 / 大人 200 円 小・中学生 /100 円　市内の小・中学生は入館無料
(20 名以上の団体は大人 150 円 小・中学生 50 円)

## 刊行物のご案内

埋蔵文化財センターでは纒向遺跡をもっと知りたい方のために以下の図書を頒布しています。

ガイドマップ『改訂版 纒向遺跡へいこう!』200 円
纒向遺跡の概説書『ヤマト王権はいかにして始まったか』500 円
『纒向遺跡発掘調査報告書２－メクリ地区における古墳時代前期墳墓群の調査－』2,000 円（残部僅少）
『纒向石塚古墳第１期整備事業　範囲確認調査（第５次～第７次）概要報告書』900 円
※ご購入方法は　桜井市立埋蔵文化財センター内　(財)桜井市文化財協会までお問い合わせください。

## 編集後記

纒向遺跡の調査や研究の動向をお知らせする纒向考古学通信をお届いたします。編集にあたってはできるだけ最新の情報を盛り込むように心掛けました。後はどの程度の頻度で発行できるのかが問題ですが、編集子は褒められないとがんばれないタイプの人間ですので皆様のお褒めと、温かい励ましの言葉が早めの次号の刊行の原動力になると思われます。宜しくお願い致します。　(teru)


**纒向考古学通信** Vol.1
発　行　平成 21 年 7 月 1 日
第 2 刷　平成 23 年 9 月 1 日
編　集　桜井市立埋蔵文化財センター
〒 633-0074 奈良県桜井市芝 58-2
ＴＥＬ 0744 － 42 － 6005
ＦＡＸ 0744 － 42 － 1366